

日本文芸界の新聞情報記録

—二〇〇一年六月版—

伊藤 昭一

「**「本を読まないで書いた」群像新人賞受賞者・萩原亨さん**」（毎日新聞六月一日・朝刊・コラム〈このごろ通信〉大井浩一記者）

「蚤の心臓ファンクラブ」で群像新人文学賞を受賞（「群像」六月号に掲載）した萩原亨さんは「本を読まず書きたいように書いた」。選考で類似が指摘された村上龍、田口ランディ両氏の作品も読んでいないという。二作目で候補作、三作目で受賞。中学卒業後、板前修業やレンタルビデオ店のアルバイトなど、さまざまな職業を体験、ふと思いついた言葉をノートにメモする習慣から、小説が生まれたという。

「**変わる出版、作家たちに新古書店ショックへ上**」（朝日新聞六月三日・出版メディア取材班）

まだきれいな本を買い取って、定価の半額や百円で売る「新古書店」が急増。作家の藤原伊織さんが「わたしの単行本は全部そろい、値段も半分から三分の一。新古書店が扱う点数が増えたら、作家は生計が成り立

たない」文芸家協会でこう訴えたという。深刻なのは漫画家も同じ。「自分の本が売れないと思っていたら、新古書店で売られているのを知った。昔の貸本屋みたいに生やさしいものじゃない」（さいとう・たかをさん）、「新刊が発売されて三日もたつと、新古書店に並んでしまう。安ければいいのか。文化の衰退を招く」（弘兼憲史さん）。著作権法では、著作物が一度公衆に譲渡されれば利益を回収したとみなすとの規定があり、印税に結びつかないためだという。新古書店の大手、ブックオフコーポレーションは、直営店だけで一七〇億円の売上げがあり、全国展開する新刊書店と比べても五位に入る。三田誠広、猪瀬直樹さんらは、著作権が侵害されているとし、広く問題化していく意向だとする。

「**太宰賞受賞、小島小陸さん(二四)の授賞式**」（毎日新聞六月五日・夕刊・大井浩一記者）

第十七回太宰治賞（筑摩書房・三鷹市共催）の授賞式が開かれ、十九世紀フランスのアルザス地方を舞台にした作品「一滴の嵐」で受賞した小島小陸さん。作品の背景は近所の図書館で調べた。「言い訳はしないで筆で語っていきたい」と語る。

「**逢坂剛氏が日本推理作家協会の理事長に**」（毎日新

聞六月六日・朝刊)

日本推理作家協会は五日の特別理事会で新理事長に逢坂剛氏(五三)を選出。前は北方謙三氏(五三)であった。

【個人情報保護法で民主党がシンポジウム／廃案の方針で】(毎日新聞六月七日朝刊・臺宏士記者)

民主党の鳩山代表は、六日都内で開かれた党主催の個人情報保護法シンポジウムで、「メディア規制法案といったほうがわかりやすいくらいだ」とし、廃案に追い込む決意を示した。またシンポでは、猪瀬直樹氏、毎日新聞・朝比奈豊編集局次長、日本テレビ・石井修平報道局長等6名が討議した。

【再評価される「私小説」／安藤宏(東京大学助教授・近代日本文学)】(毎日新聞六月七日・夕刊)

コロンビア大学・鈴木登美氏「語られた自己 近代の私小説言説」(岩波書店)、イルメラ・日地谷・キルシュネライト氏「私小説 自己暴露の儀式」(平凡社)、カルフォルニア大学のテッド・ファウラー氏「告白の修辞学―二十世紀初頭の私小説」などの書を例にあげ、私小説が日本において、従来から批判された論点的外れであったとする。小説家が出来事の仲間伝達者として客観性を持たせる、独特の形式であったとの見解を示し、「私小説」が古いように見えて、

今日的な研究テーマであるとする。

【面白いストーリー語りたい／「十三階段」で江戸川乱歩賞の高野和明さん】(読売新聞・六月九日・夕刊)

コラム・顔(文化部・佐藤憲一記者)

「十三階段」は、死刑囚の刑の執行直前に、冤罪の疑念を抱いた刑務官と元服役囚が真実を突き止めていく物語。作者は三十六歳、東京都出身。テレビや映画の脚本が本業だが、なぞ解きの要素の強いこれは活字向きと考え、ミステリー作家の登竜門に挑んだ。「行動で心理を表現せざるを得ない脚本と比べ、小説の心理描写の自由に驚いた」。選考会でも「不安や怒りが行間にあふれ出る描写力」(北方謙三委員)に満場一致の評価が集まった。小学生時代からスピルバーグ作品の影響を受け、映画監督をめざした。岡本喜八監督門下を経て、米国に留学。最近ではインターネットドラマの脚本も手がけた。

【新聞に残る情性の“遺物”／青木彰・東京新聞社客員・筑波大学名誉教授】(東京新聞六月十一日・夕刊)

毎日新聞石川県版に掲載されていた輪島地方の気象情報の一部が、一年三カ月にわたって、間違って三重県の情報を送り続け、それに読者も気象協会も、まったく気づかなかった出来事を紹介。夕刊や新聞小説、

日曜版などには、新聞情報の惰性的存在性があるのではないかと問題提起。同時に新聞がテレビのように、断片報道に走ることを警戒する。断片報道に田中外相の言動是非を判断しかねている国民に、新聞はその総合評価を正しくするべきであるとす。ワイドショー化した政治のTV報道に、新聞は振り回されるな、という論調。

【文芸家協会が著作権の管理団体設立】（東京新聞六月十一日・夕刊）

日本文芸家協会（高井有一理事）は、作家の著作権を管理する別法人「文芸著作権センター」（仮称）を、十月を目処に設立する方針を決めた。著作権仲介業務法が、廃止され、新規事業者に門戸をひらいた著作権管理事業法の十月施行に対応するもの。細部を詰めた後、センターに登録する作家を募る。

【「潮」賞の受賞者は七十一歳と六十三歳】（朝日新聞六月十二日・夕刊）

第二十回潮賞（潮出版社）のノンフィクション部門受賞者は、大阪市の鳩飼きい子さん（七二）の「不思議の薬―サリドマイドの話」。小説部門では、香川県の宮城正枝さん（六三）の「ハーブドームの月」が選ばれた。副賞100万円。

【六月探検エンターテインメント／アジア・ノワールなど】（読売新聞六月一四日・夕刊・石田汗太記者）

☆推薦作品Ⅱ真保裕一「黄金の島」（講談社）／五條瑛「断鎖」（双葉者）／川崎草志「第11回溝溝正史ミステリー大賞受賞作「長い腕」（角川書店）／吉川良太郎「第十二回日本SF新人賞受賞作「ペ・ロー・ザ・キャット全仕事」（徳間書店）／夏木静子「量刑」（光文社）。

【最古の離縁状は、協議離婚？／山梨・元禄九年八月の日付】（東京新聞六月一六日・朝刊）

甲斐の国・巨摩郡落合村（現在の山梨県甲西村）で一六九六（元禄九）年に書かれた日本最古とみられる離縁状が都内の古書店でみつかり、関東短期大（群馬県）の高木教授がこのほど出版した著書「泣いて笑って三下り半」で発表した。八月三日付で、これまで最も古いとされた栃木県の離縁状より十九日早い。文中に妻の再婚相手らしい男の名前があり、妻からの離婚要請に夫が応じた内容。当時でも妻の立場が弱くなかったことを示しているという。

【コルシカ島で行方不明の作家、射殺体で発見】（毎日新聞・六月一八日・夕刊・パリ・福島良典記者）

民族・地域運動が続く地中海の仏コルシカ島で十七日、同島生まれの作家でジャーナリストのニコレ・ジ

ユディシ氏(五二)が射殺体で発見された。同氏は昨年、仏通信社のインタビューで「政界の一部は、暴力を非難しない(民族主義)運動の強硬派と結託している」と批判していた。捜査当局は、政治絡みの暗殺と、個人的な事情による殺人の両面から捜査中。ジュディシ氏は八〇年代から新聞に執筆、九七年に随筆「コルシカ人たちの黄昏」を出版。十五日に会議に出席のためコルシカ島いりしたが、行方不明になっていた。

【際立つ文芸書不振／出版を問う・揺れる版元(2)】

(毎日新聞六月二〇日・夕刊)岸俊光、大井浩一、桐山正寿)

文芸書の売れ行きが不振。昨年の年間ベストセラーのランク二十位以内(トーハン調べ)に日本人の小説作品が一つも入らなかったのは、九十年以降初めてだという。「そこそこ売れる、ということが許されなくなっているのでは」と「文学界」細井秀男編集長(四九)。「岡村上などの人気作家を除けば、活躍中の作家でも部数が限られ、作品に触れる機会さえ少なくなつた」「売れる本だけが売れ、他の本はほとんど売れない」という二極分化極端なまでに進んだとの認識は「群像」籠島雅雄編集長(五五)や、文学関係者共通したものだとする。文芸評論家の川村湊氏は「大量生産大量

消費のマーケットとは別のルートで、純文学作品の扱いを考える時期にきている」と指摘。そのなかで、幻冬舎の石原正康常務(三八)は、「もう一度、人々を本に振り向かせるのが仕事」とし、七月に第一回受賞者の決まる「幻冬舎NET学生文学大賞」に期待を寄せている。電子メディアで文章を書き慣れてきた世代が狙いだという。

【出版界は四年連続マイナス成長、新刊書は過去最高】

(朝日新聞六月二十日・朝刊)

出版ニュース社の「出版年鑑二〇〇一年版」によると、出版物の売上げは、二兆五千二百二十四億円(書籍一兆五百五十億円、雑誌一兆四九七二億円)で前年比一・七%減。四年連続のマイナス。一方で書籍の新刊は六万五〇六五点で、前年より二千四百四十四点増えた。これは出版社が一点の部数を抑え、そのかわりに試行錯誤的に新刊を出している一部の出版社は、新刊を出すと取次ぎ会社が代金を前払いする仕組みを使い、資金繰りのために新刊を出す「自転車操業」の影響、としている。

【衰退する文庫、専門書市場／出版を問う・揺れる版元(3)】

(毎日新聞六月二一日・夕刊)岸俊光、大井浩一、桐山正寿)

昨年、文庫の創刊が相次いだ。ノンククション・雑学系を中心に十二。新潮社も十月一挙に「新潮OH! 文庫」五十点をだしたが、苦戦模様。一足はやく創刊した「小学館文庫」は三年で七二八点出した。なかで「人間まるわりの動物占い」は二百十二万部のヒットだが、文芸書と違って、あとの伸びが期待出来そうもなく増刷しにくいという。一月に創刊した「文春文庫PLUS」七点から発売し、月に二、三点加えるだけ。「昔なら文庫にしないようなものまで文庫にしてくる。過当競争がおきている」(庄野音比古編集部長)。

一方、専門書も不振が続く。みず書房の守田省吾は「専門書が売れないのは先進国に共通の現象。米国のユニバーシティ・プレス社は、英語圏という広い市場があつても輸出ができなくなっている」という。

【六月文芸時評／文芸評論家 菅野正昭】(東京新聞六月二十二日・夕刊)

《対象作品》田久保英夫「仮装」(新潮社) Ⅱ「渴愛」で終生のテーマ完結／伊藤比呂美「スリー・りろ・ジャパニーズ」Ⅱ場面の連続性欠く「米国行」／岡崎祥久「ハイパー」Ⅱ「現在を漂流する男女」多弁が難点。

【「失われた時を求めて」の全訳終えた鈴木道彦さん(七十二)】(東京新聞・六月二三日・夕刊・菊島大記者)

一九九六年九月から四年半。フランス文学者鈴木道彦さんの書齋には、今年三月完結したブルーストの「失われた時を求めて」(全十三巻、集英社)が並ぶ。「失われた時を求めて」の全体は、最終7編の「見いだされた時」のために書かれている。芸術作品こそ(失われた時)を見出す唯一の手段。《真の生、ついに見出され明らかになった生、これこそが文学である。この生はすべてのひとやかに各瞬間ごとに宿っている》と解説する。

【二〇〇一(六月)文芸時評／尾崎真理子記者】(読売新聞六月二六日・夕刊)

《対象作品》松浦寿輝氏(四七)「巴」(新書館刊) Ⅱ身体感覚極まる一瞬／田久保英夫氏「仮装」(新潮社) Ⅱやりきれない情痴を描く／大下さなえ氏「かわたれ」(群像) Ⅱ女性の内面が穏やかな態度で語られる佳品／日野啓三氏「梯の立つ都市 冥府と永遠の花」(集英社刊) Ⅱ書くために、小説家たちは魔の刻に踏み出さずにはいられない。

(注・本資料は「文芸同志会」発行の「文芸研究月報」二〇〇一年六月号より、発行人である伊藤昭一のオリジナル記事部分を除いたものから抜粋)